

†「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。門をたたきなさい、そうすれば開かれる」(マタイ7:7-12、ルカ11:9-13 参照)

7月7日の七夕。中国に起源をもつ織姫と彦星の再会を祝うこの行事は英語圏では「スターフェスティバル」と呼ばれ、星空の天の川を見上げて神さまが織姫と彦星の願いを叶えて下さることに思いを馳せるのですが、現在、特に子どもたちにとって特別な意味を持つものとなっています。神さまに願い事が届き、それが叶うように自然と手を合わせて願う行事だからです。将来、子どもたちの純粋な心からの願い事が叶うように祈りたいと思います。

イエス様は「求めなさい、そうすれば与えられる。探しなさい、そうすれば見つかる。門をたたきなさい、そうすれば開かれる」と弟子たちに話され、いわば神さまに願いが叶うように求め続けることを勧めています。この勧めは「自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父(神)は、求める者に良い物を下さるに違いない」という確信に基づくものです。このように、願い事は父と子の関係である神さまと私たちとの間で交わされるものなので、自分の願いを神さまがどのように叶えて下さるかについて思いを馳せることができるのです。

今回はイエス様の弟子として教会の基礎を作った、ペトロとパウロという2人の人物を紹介したいと思います。彼らは神さまが叶えて下さる将来の姿を求め、人々にイエス様の教えを伝えていった人です。カトリック教会では「召命」という言葉をよく使いますが、これは英語で「vocation」といい、「神さまからの呼びかけ」と理解します。願い事はこの神さまの呼びかけと結びつくことで、将来、実現したい姿をより鮮明にする源泉となるのです。紹介する二人も、この呼びかけによって背中を押され、“将来のためにこうなりたい、こうしなければ”という強い思いをもって使命と向き合いました。

～使徒ペトロ～

①、「わたしについてきなさい。人をとる漁師にしよう。」

(マタイ4:18-19、マルコ1:16-17、ルカ5:1-11 参照)

・漁師であったシモン(のちに「岩」=「ペトロ」と呼ばれるようになる)はイエス様と出会い、網を捨ててついていきます。彼はそれから後、イエス様に従い、「福音」(良い知らせ)を道具として人々に神のことばを伝え、人をとる(捕る)、つまり父である神さまに導いていくこととなります。

②、「あなたはペトロ。わたしはこの上にわたしの教会を建てる。」

(マタイ16:13-20 参照)

・周囲の人々がイエス様について分析をするなかで、シモンはイエス様のことを「メシア」(救い主)であることを宣言します。これに対してイエス様は「あなたは岩(ペトロ)である。わたしはこの上に教会を建てる」と言われました(天の門を開く鍵をあずかったため、ペトロの像は必ず鍵を持っています)。このことから、教会はこの岩の上に立てられた存在であることが分かります。

もちろん、このイエス様の言葉は象徴的な姿を指しているのですが、実際、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂はペトロの墓の上に建てられていて、信徒はこの大聖堂を身近に感じることでイエス様の遺言とペトロの使命について考えることができます。「教皇」はこのペトロの後継者で、現教皇フランシスコはペトロから数えて266代目にあたります。

～使徒パウロ～

①、「主よ、あなたはどなたですか。主よ、どうしたらよいでしょうか。」

(使徒言行録 9・5、22・10 参照)

・パウロは、はじめからのイエス様の弟子ではなく、むしろ、その弟子たちを殺そうと脅迫していた人でした(22・1-5でも打ち明けていますが、ユダヤ人として生まれた彼は熱心に法律を学び、イエス様を信じる人々を縛り上げて牢獄に入れ、殺害さえしていました。このため、パウロの像は必ず剣を持っています)。ある時、ダマスコ(現在のシリアの首都ダマスカス)に信者が集まっていると聞いたサウル(ギリシャ語でパウロ)は、捕縛するために出かけ、その途上で復活されたイエス様とはじめて出会い、その際、目が見えなくなってしまう。

・目が見えなくなったパウロはイエス様に「あなたはどなたですか?」、「どうしたらいいのですか?」と問いかけ、ダマスコに向かいます。そこでイエス様からパウロに手を置くようにと派遣されたアナニアによって、目からウロコのようなものが落ち、見えるようになります(この出来事から“目からウロコが落ちる”という故事が生まれました)。

・パウロはこのイエス様との出会いによって、自分のすべきことを再認識することになりました(パウロの回心と呼ばれます)。彼の使命は神さまから人々を排除することではなく、むしろ神さまと人々をつなげるために向けられていくことになるのです。

②、「わたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」

(使徒言行録 9・15-16 参照)

・イエス様はパウロに新たな使命を与えるにあたっての明確な意志を伝えています。そのなかでイエス様は「どんなに苦しまなくてはならないことを、彼に示そう」と言われました。キリスト教徒を迫害した罰として苦しむことになる示しているのではなく、今までの生き方を変える苦しみをイエス様は求めたのです(神さまからも人からも望まれる生き方に変わろうとすることは、相当の忍耐や苦しみ、謙虚さなどが伴うものです)。回心したパウロが求めていくことになった将来の姿は、常にこの苦しみが伴っているものでした。

※この二人のように、自分だけの思いではなく、神さまの思いがあると分かれば、自分の将来の姿が今よりももっと良いものになります。子どもたちの将来の姿を応援する私たちが、まず、神さまを求め、神さまの言葉を探し、神さまにつながる門をたたくことを大切なのです。一人ひとりに神さまは声をかけておられます。ペトロとパウロはイエス様を通して直接声をかけられましたが、私たちにはどのような形で声をかけられているか分かりません。だからこそ、子どもたちよりも多くの願い事をささげ、子どもたちと共に歩んでいくことができますように。